

羽咋地区における国際交流 ICT 活用支援

団体名●清水ゼミナール／代表者名●清水和久(人間科学部こども学科・教授)

はじめに

今年度、羽咋地区での国際交流・ICT活用支援として、羽咋小学校と羽咋高校を対象として実施。

羽咋小学校は、県内のGIGAスクール研究指定校であり、筆者は昨年度からアドバイザーとしてかかわっており、学生とともに国際交流及びICT活用のサポートをおこなうこととした。実際に羽咋小学校の6年生の児童に台湾との交流を通して、児童同士のTV会議で英語を使うことの体験や、交流先の台湾に訪問した大学生がその時の様子を日本の小学生に伝え異文化理解を深めることを目的とした。同5年生にはドローンを使った授業を実施し、プログラミングの教育を実施した。

また、羽咋高校とは、教師を目指す高校生を対象とする羽咋高校内の「教志未来塾」の講師として筆者がかかわった関係から、小中の教育現場にも導入されているプログラミング教育の体験をしてもらうことを目的と大学生が授業を行った。

活動内容

1. 羽咋小学校に対する取り組み

- ① 6月 国際教育導入ワークショップ
- ② 7月 プログラミング出前授業
- ③ 11月 第1回台湾とのTV会議支援
- ④ 1月 台湾訪問の報告会
- ⑤ 3月 第2回台湾とのTV会議支援

①国際教育導入ワークショップ

対象児童：羽咋小学校6年2クラス60人。

世界に興味を持ってもらうために「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを清水ゼミ3年生が外国の人物になりきって実施した。小学生が世界の住人になって、世界の人種の分布や、識字率、話す言葉、経済的な豊かさなど身を持って体験するものである。このワークショップによって世界の実情を知り、英語の必要性も身を持って体験することができる。

このワークショップ後、世界のことを知る必要性を理解し、外国の同世代との交流に興味を持たせることができた。



図1：学生による100人村のスライドの表紙

②プログラミング出前授業

本来は6年生相手に行う予定だったが、行事の関係でできなくなったので、5年生に行うことになった。1グループ4人で1台のドローンを使い、操作及び、プログラミング体験を行った。ドローン进行操作したことが初めての児童も多く、グループで話し合いながら、ゴールまで行くことに挑戦していた。

③第1回TV会議

羽咋小学校の交流相手は台湾の台北市の五常小学校である。ZOOMによる小グループによるTV会議で、6人の大学生はオンラインで各グループの部屋に入り、羽咋小学校の子供たちと五常小学校のTV会議をサポートした。羽咋市では、小学校において月に1回ネイティブの先生とオンラインでTV会議を行っており、ある意味度胸がついているように思われた。小学校5、6年生は週2回の英語の授業があるので、そこで学んだ英語を実際に使う場としてTV会議は有効である。相手が英語で何を言っているのか、自分の思いをどう相手に伝えるのか、先生は助けられないので、自分自身でその場で考える必要がある。今回は、各グループ30分間ほど、自己紹介や学校紹介を中心に行い、質問なども行った。

支援の大学生はサポートに徹して、会話が途切れたり、明らかに誤解があったりする時のみアドバイスをを行った。相手がうなずいてくれたり、言っていることがわかったりすると子供たちはとてもいい顔をしていた。

④台湾訪問と報告会

清水ゼミの学生は、大学のエリアスタディーズ・アドバンスドで台湾の交流先の小学校を訪問した。この企画は、学生自身が海外研修を企画するもので、12月24日から12月31日まで台湾を訪問した。羽咋小学校の子供たちには、台湾で見て来てほしいものを事前にきいており、そのミッションをもとに帰国後に羽咋小学校で話すことになっていた。また羽咋小の小学生が作ったクリスマスカードなども託され、台湾の子供たちに手渡すことになった。

台湾は旧正月であり、12月30日までは授業が行われている。つまり、日本の小学校の冬休みに当たる12月24日以降も授業がなされているので、授業見学が可能であった。清水ゼミ生は交流先の2クラスに入り、羽咋小から預かったクリスマスカードを渡すとともに、金沢の紹介のプレゼンを英語で行った。帰国後、1月18日(水)に羽咋小学校を訪問し、台湾のクイズを入れながら、台湾の五常小学校の様子を紹介した。

⑤第2回TV会議

3月2日(木)に実施。

羽咋小学校はキャリア教育を研究テーマとしているので、2回目は将来なりたい職業などを発表した。台湾はSDGsをテーマにしており、SDGsを踏まえた職業選択を考えるなど、相手を意識した職業選択を目指した発表となった。

2. 羽咋高校に対する取り組み

1月17日(火) 16時30分から対象高校生10名に対してドローンを使ったプログラミング教育を行った。高校生なので地元のネタを使ったドローンのコースの事前に考えてもらって実行した。羽咋の地域はUFOのネタで町おこしを行っており、渚ドライブウェイや、気多大社などの観光スポットがあるので、それらを踏まえたコース設計となった。

将来的には、高校生が地元の小学校用にドローンのコースを考えて指導できるようになるとよいと思った。

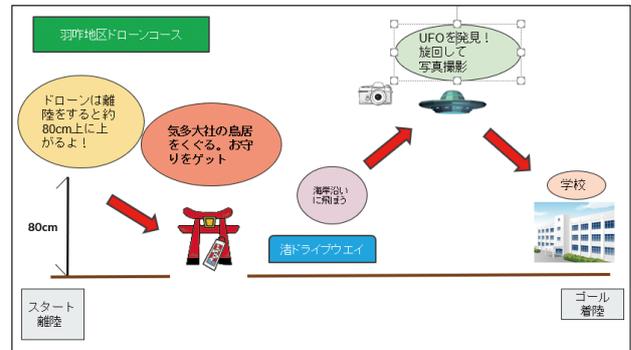


図 2: 羽咋高校生が考えたドローンのコース

成果、結果の考察

小学校教員志望の学生が、小学校に出前授業に行くことによって、学生は子供の前で話す練習になり、小学生は、大学生のワークショップを受けられて楽しい思いを持つことになる。週2回になった英語を使う場面として、海外の同世代の小学生と交流することは、楽しく、英語の有用性を実感できる体験となった。また、交流先の台湾の小学校に大学生が自分たちの代わりに行ってその報告をしてもらうことは、より身近に外国を感じられ、大学にも報告のタスクがあるので、教材づくりの視点をもって、伝え方を工夫することになる。

高校生に対しては、ドローンのコースの作り方や飛ばし方などを大学生が指導することで、教師志望の高校生には教材の作り方を伝えることができた。

今後の課題、展望

次年度も羽咋地区において、国際交流及び ICT 活用のサポートを行っていききたい。具体的には、この両者をつなげるために、子どもたち自身が羽咋の地域紹介をドローンで撮影し外国の交流校に伝える等が考えられる。またそのサポートを地元の高校生がするなどの展開も考えられる。

国際交流と ICT 活用をうまく組み合わせることができることを大学生が、小学生や高校生に提案できるようにしていきたい。